

カンボジア

保健搬送システムの2012年から2014年4月までの利用状況と成果

カンボジア事務所では大塚製薬様のご支援を頂き、患者の緊急時搬送を実現する保健搬送システム活動を2012年より実施しています。当地で一般的な乗り物であるトゥクトゥクを、村から保健施設への迅速な交通手段として村で共有するものです。



保健センター前に停めた
トゥクトゥク

舗装の道路は大きな穴だらけでぬかるみ、4WD車でさえ走行が大変でした。

そんな中、大塚製薬様より7台のトゥクトゥクが3つの保健センターと12村に寄贈され、保健センタースタッフや村人から大変喜ばれました。導入後は村主導の運営に育て上げることがPHJの活動のポイント。運営は村人から成る運営委員会により行われ、運営資金も会員になった村人の月10~20円程度の会費で賄われます。意気揚々の開始でしたが、不正確な記録管理、委員内

妊婦や急病人の多くは、交通手段がすぐに見つからない、道路状態が劣悪と、保健施設に行くまで多くの時間を費やし、医療ケアの遅れを経験します。私が初めてカンボジアの農村を訪れた時はちょうど雨季。未

での仲違い、集金の遅れ等、様々な問題が生まれました。

最初の1年は軌道に乗せるべくPHJが全面的に支援しました。2年目からはあくまで「村人主導の運営」にこだわり、PHJが手を差し伸べればすぐ解決できる問題でも、運営委員自身が結論や策を出すまで見守りました。何か月も変化のない状況でPHJスタッフも「この活動を成功させなければ」というプレッシャーと闘いながら、粘り強く取り組みました。

2年を過ぎた今、運営委員自らが毎月の会議を行い、PHJに議事録とデータを提出し活動報告するまでになりました。緊急搬送件数も毎月一定数出ており利用も途切れることはありません。出産関連搬送が全体の半分以上を占め、異常分娩で高次病院へ緊急搬送されるケースも多く含まれます。妊婦の安全なお産へ確かな貢献があると思うと苦勞も報われます。2012年に搬送システムを開始させてから2014年4月まで、搬送実績は計207件、搬送人数にすると316名にも上ります。この実績数は一人一人の命の数です。その実感はかけがえのないものであり、この実感を持ち続け保健搬送システムが村で大切な役割を果たし続けることを願って止みません。

カンボジア事務所 林 朝子

インドネシア

健全な衛生環境推進活動を始めます

地域医療システム強化事業を実施しているバンタン州セラン県。ティルトヤサ自治区へ向かう途中の農業灌漑用水では、朝から沢山の村人を見かけます。行水をする人、洗髪をする人、歯磨きをする人、用を足す人、洗濯をする人、食器を洗う人、お米をとぐ人……このような活動が5メートル四方の範囲で見られます。



農業灌漑用水場で
洗濯、食器洗い

このような衛生環境を改善しようと現状把握のための家庭訪問調査を実施しました。驚いたのは、目視できる現状では80%以上の人が用足しは野外…皆自宅にトイレがないんだな…と

携帯電話が使用できるようになったり、バイクの台数が増えたりなど、地方での生活に変化が見られる反面、水源やゴミ処理などの生活衛生環境はこの10年ほとんど改善が見られないのが現状です。



ゴミ置き場の一つ

思っていたのとは逆の結果でした。70%以上の家庭にトイレがありました。用を足した後、水でお尻を洗う文化のインドネシアでは、「天然のウォッシュレット」のほうが手間が省けて楽…と考えているようです。

彼らにとって大事な用水路に、家庭ゴミなどを平気で捨てる習慣もあります。調査をした1ヵ所の村では、村内に大きな野外ポイ捨てゴミ置き場が48箇所もありました。

このような状況の人々の意識改革・行動変化を通じて改善していきたいと新しい活動を予定しています。具体的には、トイレのない小学校にトイレや洗面所を設置したり、村に公共のゴミ捨て場・焼却設備を含む処理所を設置し、生徒や村人に衛生環境改善の教育を行っていくと思っています。



現在ある小学校のトイレ

インドネシア事務所 前所長 伊藤 美夏

タイ

農村部での心臓病移動検診

タイでは先天的な心疾患を持つ子供が年間8,000人も生まれており、このうちの3000～4000人が手術を必要としています。しかし、経済的な理由などから、手術を受けられるのはこのうちの半数ほどです。PHJはこの状況を改善するため、チェンマイ大学病院やランパン病院と連携し、タイ北部の先天性心疾患児を支援する事業を行っています。

1998年の事業開始以来、累計345名の手術を実施してきました。(2014年4月末時点) また、手術だけではなく、看護師の研修、術後の経過観察のための家庭訪問、小児心臓病に関する資料を作成し、世界心臓デーなどのイベントにて配布するなど様々な活動を行ってきました。

そうしたなか、都市部以外の地域では医療水準が高くないため、心臓病などの正確な診断がくたせず、適切な治療を施せないケースが多くみられるという課題がでてきました。

このため近年では、チェンマイ大学病院やランパン病院の専門医師チームが医療器材を持ち込み、農村部などの地方病院で心臓病検診を行っています。

年に1～2回心臓病の移動検診を行い、手術が必要だと判断された患者は専門的な医療機関に移され手術を受けることになります。また、この移動検診は、地

方病院の医師や看護師にとっては専門医から実地訓練を受ける機会にもなり、大変喜ばれています。



左の写真のマ・カイ・カイちゃん(8か月)は移動検診を受けた一人。彼女は生まれつき標準よりも体重が軽く、疲れやすいということで地域の病院を受診したところ不整脈が見つかっていました。そこで2013年11月にチェンマイ大学病院の専門医による移動検診

を受け、心臓病(動脈管開存症)であると診断されました。

その後ランパン病院に移され、12月に手術を受けることが出来ました。

手術は成功し、現在はとても元気になっています。



チェンマイ大学病院の医師による移動検診の様子

本事業はエドワーズライフサイエンス基金様、セントラル硝子株式会社様、第一三共タイ様の支援を得て実施しています。

タイ事務所所長 ジラナン・モンコンディー

ベトナム

乳がん早期発見事業

ベトナムでの乳がん罹患率は年々上昇していますが、乳がんに関する教育、検診、治療に関して十分な対応が取られていません。PHJは、2011年、2012年と現地NGOのCASCDと連携し、ハノイで乳がん早期発見事業を実施してきました。2013年からは、女性と子供の健康改善を目標に活動する全国組織ベトナム・ウイメンズ・ユニオン(VWU、メンバー1,400万人)と協同で、活動地を更に拡大し、3年計画で乳がん早期発見事業を実施しています。



ジラナン所長が講師となってトレーナーズ・トレーニングを実施

この事業は、対象地域の女性が乳がんに関する知識と自己触診法を学ぶことで、乳がんを早期に発見し、精密検査と適切な治療を受けるための医療機関への紹介制度を確立することを目指しています。

具体的な活動として、PHJは、VWUの職員や地域の保健スタッフ対象にトレーナーズトレーニングを実施しています。この研修の受講者が講師になり、地域住民に乳がん触診法を伝えていきます。1年目となる2013年は、対象地域である2市3省(ハノイ市、ハイ

フォン市、ハナム省、フンイエン省、タイグエン省)内の10県にて、100回の教育セッションを実施しました。30才から70才の女性計3,794名が乳がん触診法を学んだことで、自己触診実施率が26%から100%に上昇しました。このうち86名の女性にしこりが見つかり、病院にて精密検査を受けた結果、10名が乳がんと診断され治療を受けました。



乳房のサンプルを使った触診研修

1年間の活動を終え、VWUはハノイ市が自力で活動を継続できると判断しました。2年目となる2014年は、新たにナムディン省を含む1市4省内の新たな10県にて、5,000名を対象にした事業を実施しています。

本事業は横河商事株式会社様の支援を得て実施しています。

タイ事務所所長 ジラナン・モンコンディー

「PHJと私との出会い」

新沼 千尋 (カンボジアスタディツアー 2014 参加者)

右から3人目が筆者



看護職である私は、途上国の医療や公衆衛生に興味があり、何度か途上国に足を運んでいました。「次はカンボジアの現状が知りたい」と漠然と思っていた時、ふと私の目にとまったものは、PHJの「アジアのおはなしカレンダー」でした。私が働く被災地気仙沼を元気づけるために贈ってくださったもの。それがPHJに興味を持つきっかけとなりました。そして、東日本大震災後のPHJによる気仙沼への支援を、あらためて知る機会となりました。その時期に、偶然にも、PHJ企画のカンボジアスタディツアーがあり、職場の理解のもと、参加することとなりました。

スタディツアーではカンボジアの母子保健、公衆衛生について学び、訪れた村では、トイレがない、きれいな水が使えない、といった状況を目にしました。PHJは、トイレの建設支援や、手洗い教育をするなど衛生への意識を高める活動を行っていました。そして最近土埃による呼吸器疾患が多いことを知った今回のスタディツアーの参加メンバーは、「きれいな水を使ったうがい」の普及を農村の人へ提案しました。

その様子を見て、私の脳裏には3年前の震災後の光景が浮かびました。ライフラインが止まり、水が使えず、水洗トイレは便が幾重にも重なり、清潔に使うことなどできませんでした。また、津波でひっくり返った大地は更地と

なり、風が吹くと土埃を巻き上げ、肺炎の症状を訴える人がたくさんいる状況でした。そんな中感謝されたのは水の支援。そして、医療機関で、感染予防のために力を入れたのは、うがいと手洗いでした。カンボジアの村に必要な支援は、震災後の東北にも共通する、ということがこの時実感しました。

その後、PHJから、私の母校である准看護学校に「アジアのおはなしカレンダー」が届きました。それがきっかけとなり、私は母校からの夏季特別講座の講師の依頼を受けることに。そこでPHJでの体験や、地域での医療ボランティア活動についてお話をさせていただくこととなりました。PHJからの「物品」としての支援は、今、こうして形を変えながら、様々なつながりが出来ていくことに不思議なご縁を感じています。このご縁を大切に、これからの展開も楽しみにしていきたいと思っています。



※写真は、私が現在通っている看護学校前に停車していたPHJからの支援の車です。現在、フル活用されています。

フィリピン台風30号被災者支援の御礼

昨年11月フィリピン中部を襲った台風により各地で甚大な被害が発生。PHJは現地で災害支援を行っているシンガポールの人道支援・災害支援団体 マーシーリリーフ(MR)を通して被災者の支援に頂くため、昨年11月19日に募金を開始し、2014年4月30日に終了いたしました。これまでに沢山の個人、法人の皆様にご協力頂きました。心より感謝しております。

集まった募金総額：…………… ¥1,873,500

MRへの支援総額：…………… ¥1,734,000
 {GS Yuasa 充電器：…………… ¥134,000}
 {募金送金：…………… ¥1,600,000}
 輸送料、送金手数料他…………… ¥139,500

MR 海外事業部シニアマネージャー石関正浩さんからのメッセージ
 ビーブルズ・ホープ・ジャパンの皆さま、昨年11月にフィリピン中部を襲った台風30号被災者支援に多大なるご協力を頂き、誠に有難うございました。マーシーリリーフ(Mercy Relief, 以下MR)を代表し、改めて御礼申し上げます。

皆さまからお預かりした募金160万円は、MRが実施し

た台風30号被災者緊急人道支援活動(総計492,000シンガポールドル≒4千万円)の一部に使わせて頂きました。昨年11月から12月まで、MRの7つの救援チームが現地に入り、総計8万人程の被災者の皆さんに緊急支援物資をお届けしました。現地パートナーと協力し、支援が届きにくい地域に入り、ニーズに対応し、食料品や身の回りを清潔に保つ石鹸等の衛生用品、簡易浄水器、雨露を凌ぐ防水布、住居再建に向けた大工道具や屋根材となるトタン板の配布、医療チーム派遣等を行なうことができました。

皆様のご協力で、MRでは、緊急人道支援を行うことができ、被災地の生活再建と災害に強い地域づくりを目指す災害復興事業に着手することができました。深く感謝しています。



緊急支援物資(食料品)配布
13年11月バナイ島にて



簡易浄水器寄贈前に使用方法を
トレーニング 13年11月パラワン島にて

○ 第49回 運営委員会を開催しました

5月21日(水)17:00~19:00、東京水道橋にある全日本病院協会の会議室において、PHJの運営委員会を開催しました。インドネシアで新しく開始する健全な衛生環境推進活動、カンボジアの現活動の終了と新規活動地域での事業計画、2月から3月にかけて実施したカンボジアスタディツアーの映像報告、タイでの高等専門学校生を対象としたHIV・エイズ予防教育、ミャンマー事業の立ち上げ

進捗状況、東日本大震災復興支援、フィリピン台風緊急支援募金について報告しました。

Q&Aでは事業の背景についての質問に担当者が回答し、活発な意見交換と専門的なアドバイスを頂く機会となりました。



永眠のお知らせ

当団体の代表 木村敏雄は、2014年5月30日(金)に、死去いたしました。享年64歳でした。
ここに生前のご厚誼を深く感謝するとともに、謹んでご通知いたします。
なお葬儀は近親者のみにて営まれました。

ピープルズ・ホープ・ジャパン(PHJ)代表 木村敏雄氏のご逝去を悼んで

PHJ 理事長 小田 晋吾



2012年10月グローバルフェスタにて

5月30日(金) 病気療養中だった木村代表が朝5時過ぎにお亡くなりになったという知らせを受け、PHJ一同驚きと深い悲しみに包まれました。

3月に黄疸の症状が出て検査入院し、その後5月に手術を受けると伺っておりました。7月には復帰して再び活動に従事されると我々一同信じ、回復を祈念しておりましたのに本当に残念です。ご冥福を心からお祈りいたします。

木村さんとは私が理事長就任以来共に手を携え様々な活動に従事してまいりました。強い責任感とネバギブアップの精神で日々の活動に取り組み、また人に対する思いやりと誠実な対応はPHJのスタッフの

みならず多くのドナー様や関係者の皆様から厚い信頼を受けてこられました。

代表として木村さんがリードしてきた活動としては①PHJのビジョン・ミッションの見直しと共有、②東日本大震災における緊急・復興支援、③寄付型自販機の導入、④新たな活動地としてのミャンマー・プロジェクトへの精力的な取り組み、⑤スポンサープログラムの推進等々がありますが、それらすべてにおいてうまくチームをまとめ大きな成果を上げてこられました。これらを思うたびに、木村さんを失ったことは我々にとって大きな損失ではありますが、スタッフ一同代表の遺志を受け継ぎ、PHJの活動を深化させてゆく所存であります。

これまでの木村代表へのご支援ご協力に対し改めてお礼を申し上げると同時に、皆様には変わらぬご支援をお願いいたします。

ミャンマーでの事業開始を楽しみにしていた木村さん

海外事業支援グループ 中田 好美

ミャンマーでの新事務所開設は、近年のPHJの一大事業ですが、木村さんは熱心にその立ち上げに取り組んでおられました。自ら現地へ赴き、保健大臣に会い、地域の医療施設を訪問し、医療保健の現状を見てきました。日本に帰ると、周囲の人全員にミャンマー訪問の様子を興奮しながら話していました。本当に楽しそうでした。現在、事務所開設の最初のステップとして保健省との合意書を署名する目前まで来ています。一番それを心待ちにしていた木村さんは、署名式が6月頃に開催されるとの連絡がきた時にはすでに入院されていました。署名式のことを知らせたメールの返信には、「おめでとー」という言葉と現地の関係者や支援に賛同いただいたドナー様やPHJスタッフへの感謝が述べられていました。木村さんが事務所開設を待たずしてお亡くなりになったのはとても残念です。今後は木村さんの遺志を引き継いで新事務所を立ち上げることに尽力したいと思っています。



保健大臣(右から3人目)にお会いしました。
2014年3月

東日本大震災緊急・復興支援で木村さんと東北を訪ねたこと

東日本大震災支援担当 横尾 勝

PHJとして初めての国内活動となった東日本大震災支援。活動の発端となった全日本病院協会との連携を提案し、いち早く動いたのが木村さんでした。その結果、気仙沼市医師会からも協力いただき、被災した約30の民間クリニックにニーズにあった医療機器や什器類を寄贈できました。こうした活動を進める中で木村さんと私は幾度も東北へ訪問しました。私たちは早朝、東京を車で出発し、東北道の一関ICで降り気仙沼訪問の後、南三陸経由で石巻、多賀城の支援先を訪問、仙台から東北道で東京に戻るといって、一泊二日の出張でした。車での訪問は20回近くになり、運転が好きな木村さんと私は、満開の桜、収穫の秋、降り積もる雪など、東北の四季を万感の思いにひたりながら走りました。被災地の病院やクリニックの方々の喜ぶ顔を見たい、と東北への長旅はむしろ楽しむようでもありました。木村さんの被災地復興への熱い思いは被災された方々に医療サービスという形をかえて届いていた、と信じています。木村さんの被災地復興への強い願いを私たちも受け継いで支援に取り組んでいきたいと思っています。ご冥福をお祈りいたします。



石巻仮診療所のドクターカーの前で

お知らせ

*ホープジャパンニュースを郵送でなく、PDFでお受け取りになりたい方は info@ph-japan.org までお申し込みください。次号よりメールに添付してお送りいたします。